

平成28年度 B3二二三

3 次の【物語の一部】と【図鑑の説明】を読んで、あとの問いに答えなさい。

【物語の一部】

「(二)までのあらずじ」 少年時代、ランプの明るさに驚いた巳之助は、ランプ売りになる。自分が売ったランプで、暗かった村の家々が明るくなっていくのを喜んでいたが、やがて町には電気が通り始める。

さてある日、巳之助がランプの芯を仕入れに大野の町へやってくると、五、六人の人夫が道のはたに穴を掘り、太い長い柱を立てているのを見た。その柱の上の方には腕のような木が二本ついていて、その腕木には白い瀬戸物のたるまさんのようなもの①がいくつかのついていた。こんな奇妙なものを道のわきに立ててなににするのだらう、と思いつながら少し先にゆくと、また道ばたに同じような高い柱が立っていて、それには雀が腕木にとまって鳴いていた。

この奇妙な高い柱は五十メートルぐらい間をおいては、道のわきに立っていた。

巳之助はついに、ひなたでうどんを乾している人いきいてみた。すると、うどんやは「電気とやらいうもんがこんどひけるだげな。それでもう、ランプはいらんよになるだけな。」と答えた。

巳之助にはよくのみこめなかった。電気のことなどまるで知らなかったからだ。ランプのかわりになるものらしいのだが、そうとすれば、電気というものはあかりにちがいはあるまい。あかりなら、家の中にもせばいいわけで、なにもあんなとてつもない柱を道のくろに何本もおっ立てることはないじゃないかと、巳之助は思ったのである。

それから一月ほどたって、巳之助がまた大野へ行くと、この間立てられた道のはたの太い柱には、黒い綱のようなものが数本わたされてあった。黒い綱は、柱の腕木にのっているたるまさんの頭を一まきして次の柱へわたされ、そこでまたたるまさんの頭を一まきして次の柱にわたされ、こうしてどこまでもつづいていた。

注意してよく見ると、ところどころの柱から黒い綱が二本ずつたるまさんの頭のところで別れて、家の軒端につながれているのであった。

「へへえ、電気とやらいうもんはあかりがともるもんかと思つたら、これはまるで綱じゃねえか。雀や燕のええ休み場というもんよ。」と巳之助が一人であざわらいながら、知り合いの甘酒屋にはいつてゆくと、いつも土間のまん中の飯台の上につるしてあった大きなランプが、横の壁のあたりに取りかたづけられて、あとにはそのランプをずっと小さくしたような、石油入れのついていない、変なかつこのランプが、丈夫そうな綱で天井からぶらさげられてあった。

「なんだやい、変なものをつるしたじゃねえか。あのランプはどこが悪くでもなかったかやい。」と巳之助はきいた。すると甘酒屋が、

「ありや、こんどひけた電気というもんだ。火事の心配がのうて、明るうて、マッチはいらぬし、なかなか便利なもんだ。」と答えた。

「へッ、へんで、これんなものをぶらさげたもんよ。これじゃ甘酒屋の店もなんだか間がぬけてしまった。客もへるだらうよ。」甘酒屋は、相手がランプ売りであることに気がついたので、電灯の便利なことはもういわなかった。

「なア、甘酒屋のとつあん。見なよ、あの天井のどこを。ながねんのランプの煤であそこだけ真っ黒になつとるに。ランプはもうあそこ居つてしまつたんだ。今になって電気たらいいう便利なもんができたからとて、あそこからはずされて、あんな壁のすみっこにひっかけられるのは、ランプがかわいそうよ。」

こんなふうには巳之助はランプの肩をもつて、電灯のよいことはみとめなかった。

ところでまもなく晩になって、だれもマッチ一本すらなかったのに、とつぜん甘酒屋の店が真昼のように明るくなったので、巳之助はびっくりした。あまり明るいので、巳之助は思わずうしろをふりむいてみたほどだった。

「巳之さん、これが電気だよ。」

巳之助は歯をくいしばって、ながいあいだ電灯を見つめていた。敵でもにらんでいるようなおつきであった。あまり見つめていて眼のたまが痛くなったほどだった。

「巳之さん、そういつちやなんだが、とてもランプで太刀うちほできないよ。ちょっと外へくびを出して町通りを見てくらんよ。」巳之助はむつつりと入り口の障子をあけて、通りをながめた。どこの家どこの店にも、甘酒屋のと同じように明るい電灯がともっていた。光は家の中にあまって、道の上にまでこぼれていて、ランプを見なれてきた巳之助にはまぶしすぎるほどのあかりだった。巳之助は、くやしさに肩でいきをしなから、これも長い間ながめていた。

(注1) ひけるだけな＝ひけるのだぞうだ。

(注2) 道のくろ＝道のはし。

(新美南吉「おじいさんのランプ」による)

※ 問題は、次のページに続きます。

部屋の主な明かりの変遷

あんどん
行灯

(江戸時代)

油を入れた皿に芯を浸し、火をつけて使う。



石油ランプ

(明治時代から昭和初期)

行灯より明るい、部屋全体を照らすほどではない。



白熱電球

(明治時代中期から現在)

明かりが揺れたり消えたりせず、部屋全体を照らす。



蛍光灯

(昭和から現在)

白熱電球より明るい。消費電力が少なく長持ちする。

石油ランプ



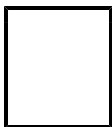
●使い方●

- ① 油つぼに石油を入れる。
- ② ほやを口金から持ち上げて、芯に火をつける。
- ③ 調節ねじで芯の長さを変え、明るさを調節する。
- ④ ほやが黒く汚れたら、口金から外して内側を磨く。

二 【物語の一部】に書かれている事柄について、【図鑑の説明】から分かることとして最も適切なものを、次の1から4までの中から一つ選びなさい。

- 1 — 線部①「腕木」とはどのようなものか。
- 2 — 線部②「白い瀬戸物のだるまさんのようなもの」とはどのようなものか。
- 3 — 線部③「黒い綱」とはどのようなものか。
- 4 — 線部④「石油入れ」とはどのようなものか。

解答らん



※ 問題は、次のページに続きます。

三 あなたは、【図鑑の説明】を読むことで、【物語の一部】の□の中のどの部分についてよく分かるようになりましたか。よく分かるようになった部分と、その部分についてどのようなことが分かったのかを、次の条件1と条件2にしたがって書きなさい。なお、読み返して文章を直したいときは、二本線で消したり行間に書き加えたりしてもかまいません。

条件1 【物語の一部】の□の中のどの部分についてよく分かるようになったのかを明確にして書くこと。

条件2 条件1で取り上げた部分について、どのようなことが分かったのかを【図鑑の説明】の内容に触れて書くこと。

解答らん

--	--	--	--

3 次の【物語の一部】と【図鑑の説明】を読んで、あとの問いに答えなさい。

【物語の一部】

「(二)までのあらずじ」 少年時代、ランプの明るさに驚いた巳之助は、ランプ売りになる。自分が売ったランプで、暗かった村の家々が明るくなっていくのを喜んでいたが、やがて町には電気が通り始める。

さてある日、巳之助がランプの芯を仕入れに大野の町へやってくると、五、六人の人夫が道のはたに穴を掘り、太い長い柱を立てているのを見た。その柱の上の方には腕のような木が二本ついていて、その腕木には白い瀬戸物のたるまさんのようなもの①がいくつかのついていた。こんな奇妙なものを道のわきに立ててなににするのだらう、と思いつながら少し先にゆくと、また道ばたに同じような高い柱が立っていて、それには雀が腕木にとまって鳴いていた。

この奇妙な高い柱は五十メートルぐらい間をおいては、道のわきに立っていた。

巳之助はついに、ひなたでうどんを乾している人いきいてみた。すると、うどんやは「電気とやらいうもんがこんどひけるだげな。それでもう、ランプはいらんよになるだけな。」と答えた。

巳之助にはよくのみこめなかった。電気のことなどまるで知らなかったからだ。ランプのかわりになるものらしいのだが、そうとすれば、電気というものはあかりにちがいはあるまい。あかりなら、家の中にもとせばいいわけで、なにもあんなとてつもない柱を道のくろに何本もおっ立てることはないじゃないかと、巳之助は思ったのである。

それから一月ほどたって、巳之助がまた大野へ行くと、この間立てられた道のはたの太い柱には、黒い綱のようなものが数本わたされてあった。黒い綱は、柱の腕木にのっているたるまさんの頭を一まきして次の柱へわたされ、そこでまたたるまさんの頭を一まきして次の柱にわたされ、こうしてどこまでもつづいていた。

注意してよく見ると、ところどころの柱から黒い綱が二本ずつたるまさんの頭のところで別れて、家の軒端につながれているのであった。

「へへえ、電気とやらいうもんはあかりがとるもんかと思つたら、これはまるで綱じゃねえか。雀や燕のええ休み場というもんよ。」と巳之助が一人であざわらいながら、知り合いの甘酒屋にはいつてゆくと、いつも土間のまん中の飯台の上につるしてあった大きなランプが、横の壁のあたりに取りかたづけられて、あとにはそのランプをずっと小さくしたような、石油入れのついていない、変なかつこのランプが、丈夫そうな綱で天井からぶらさげられてあった。

「なんだやい、変なものをつるしたじゃねえか。あのランプはどこか悪くでもなつたかやい。」と巳之助はきいた。すると甘酒屋が、

「ありや、こんどひけた電気というもんだ。火事の心配がのうて、明るうて、マッチはいらぬし、なかなか便利なもんだ。」と答えた。

「へッ、へんで、これんなものをぶらさげたもんよ。これじゃ甘酒屋の店もなんだか間がぬけてしまった。客もへるだらうよ。」甘酒屋は、相手がランプ売りであることに気がついたので、電灯の便利なことはもういわなかった。

「なア、甘酒屋のとつあん。見なよ、あの天井のどこを。ながねんのランプの煤であそこだけ真っ黒になつとるに。ランプはもうあそこ居つてしまつたんだ。今になって電気たらいいう便利なもんができたからとて、あそこからはずされて、あんな壁のすみっこにひっかけられるのは、ランプがかわいそうよ。」

こんなふうには巳之助はランプの肩をもつて、電灯のよいことはみとめなかった。

ところでまもなく晩になって、だれもマッチ一本すらなかったのに、とつぜん甘酒屋の店が真昼のように明るくなつたので、巳之助はびっくりした。あまり明るいので、巳之助は思わずうしろをふりむいてみたほどだった。

「巳之さん、これが電気だよ。」

巳之助は歯をくいしばって、ながいあいだ電灯を見つめていた。敵でもにらんでいるようなおつきであった。あまり見つめていて眼のたまが痛くなつたほどだった。

「巳之さん、そういつちやなんだが、とてもランプで太刀うちほできないよ。ちょっと外へくびを出して町通りを見てくらんよ。」巳之助はむつつりと入り口の障子をあけて、通りをながめた。どこの家もこの店にも、甘酒屋のと同じように明るい電灯がともっていた。光は家の中にあまって、道の上にまでこぼれていた。ランプを見なれてきた巳之助にはまぶしすぎるほどのあかりだった。巳之助は、くやしさに肩でいきをしながら、これも長い間ながめていた。

(注1) ひけるだけな＝ひけるのだぞうだ。

(注2) 道のくろ＝道のはし。

(新美南吉「おじいさんのランプ」による)

※ 問題は、次のページに続きます。

部屋の主な明かりの変遷

行灯

(江戸時代)

油を入れた皿に芯を浸し、火をつけて使う。



石油ランプ

(明治時代から昭和初期)

行灯より明るい、部屋全体を照らすほどではない。



白熱電球

(明治時代中期から現在)

明かりが揺れたり消えたりせず、部屋全体を照らす。



蛍光灯

(昭和から現在)

白熱電球より明るい。消費電力が少なく長持ちする。

石油ランプ



●使い方●

- ① 油つぼに石油を入れる。
- ② ほやを口金から持ち上げて、芯に火をつける。
- ③ 調節ねじで芯の長さを変え、明るさを調節する。
- ④ ほやが黒く汚れたら、口金から外して内側を磨く。

二 【物語の一部】に書かれている事柄について、【図鑑の説明】から分かることとして最も適切なものを、次の1から4までの中から一つ選びなさい。

- 1 — 線部①「腕木」とはどのようなものか。
- 2 — 線部②「白い瀬戸物のだるまさんのようなもの」とはどのようなものか。
- 3 — 線部③「黒い綱」とはどのようなものか。
- 4 — 線部④「石油入れ」とはどのようなものか。

解答らん

4

※ 問題は、次のページに続きます。

三 あなたは、【図鑑の説明】を読むことで、【物語の一部】の□の中のどの部分についてよく分かるようになりましたか。よく分かるようになった部分と、その部分についてどのようなことが分かったのかを、次の条件1と条件2にしたがって書きなさい。なお、読み返して文章を直したいときは、二本線で消したり行間に書き加えたりしてもかまいません。

条件1 【物語の一部】の□の中のどの部分についてよく分かるようになったのかを明確にして書くこと。

条件2 条件1で取り上げた部分について、どのようなことが分かったのかを【図鑑の説明】の内容に触れて書くこと。

解答らん

【例】 図鑑の説明から、天井が煤で真っ黒になっているのは、ほやの上の口から煤が出るためであることが分かりました。

(正答の条件)

次の条件を満たして解答している。

- ① 【物語の一部】の□の中のどの部分についてよく分かるようになったのかを明確にして書いている。
- ② よく分かるようになった部分について、どのようなことが分かったのかを【図鑑の説明】の内容を適切に取り上げて書いている。

(正答例)

- ・ 図鑑の説明から、天井が煤で真っ黒になっているのは、ほやの上の口から煤が出るためであることが分かりました。
- ・ 「甘酒屋の店が真昼のように明るくなった」という部分について、よく分かるようになった。「部屋全体を照らす」ことができる白熱電球が、店中を照らしていたということだ。
- ・ 石油ランプは「芯」に火をつけたり、「調節ねじ」で明るさを調節したりしなければならなくて手間がかかるので、甘酒屋は「マッチはいらぬし、なかなか便利なもんだ」と電灯のことをほめたのだと思いました。